

開催日 2020年12月18日（金）

第6回となる「オリンピック・パラリンピック教育推進プログラム」を、東京都立杉並工業高等学校にて、高校2年生120名を対象に開催いたしました。

当日は、午前中の授業時間を利用して、義肢装具士による「障がいの理解と義肢装具士の仕事」、「進路プレゼンテーション」の講義と、義足ユーザーによる日常動作、及び講演&パフォーマンスを、また休憩時間帯には、実際に触れてもらうため義肢装具を展示しました。

今回のプログラムは(公社)日本義肢装具士協会 障がい者/パラアスリート/P0 啓もうWGと東日本支部から、講師1名と運営スタッフ2名が対応しました。それぞれのプログラムについて解説いたします。

なお、開催時期は新型コロナウイルス感染拡大中に伴い、学校から指示される感染予防対策の方法を厳守し、当協会においても検温や手指の消毒、フェイスシールド・マスクの装着など感染予防対策を徹底しました。

講義 ～障がいの理解と義肢装具士の仕事～

義肢装具士による講義では「障がい」についての概要、義肢装具の説明や義肢装具士の仕事に関して、多くの写真を用いて細かに説明しました。

さらには、パラリンピックでの義肢装具士の関わりについても、質問形式のスライドや、陸上パラアスリートの動画をスライドに盛り込み、多くの関心を引くことが出来ました。



進路プレゼンテーション

進路プレゼンテーションでは、義肢装具士になるために必要な事や実際の業務内容、義肢装具業界の現状と将来性など、進路を考える高校2年生に適した内容を説明しました。

義足ユーザーによる講演

講師には大腿義足ユーザーであり、現役の立位テニス選手にご協力いただきました。講演は「自己紹介」・「障がいのある人の心理」・「ダイバーシティとは」・「立位障がい者テニス」に関しておこないました。障がいについては、当事者にしか伝えることが出来ない体験談を基に、分かり易い言葉で丁寧に、時には英単語やユーモアを交えながら説明されていました。



<パフォーマンスにおける生徒たちの様子>

義足動作 パフォーマンス

日常動作のパフォーマンスでは、義足の装着方法や靴の脱着などの動作から始まり、歩行から走行、階段昇降など、スライドでは表現出来ないことを、義足ユーザーが実演することで、生徒達の興味を一斉に集め、理解度の向上に繋げることが出来ました。

立位テニスのパフォーマンスでは体育館の中央部を空け、テニス部のコーチとラリーがおこなわれ、驚きと歓声に包まれ終了となりました。



<立位テニスのパフォーマンスの様子>

イベントを終えて. . .

今回のプログラムは新型コロナウイルス感染予防対策が徹底される中、従来のプログラム内容を幾度と調整することで、開催することが可能となりました。さらに、今までのプログラム実施は小中学校においての開催でしたが、今回は初めて高校生を対象にプログラムを実施しました。

プログラム内容は義肢装具士と義足ユーザーによる講義&パフォーマンスに加え、初の試みである「進路プレゼンテーション」を導入しました。また、休憩時間帯には義肢装具を展示することで、実物を自由に触れることが可能となり、多くの関心や質問が義肢装具士や義足ユーザーに寄せられました。

イベント開催後に実施したアンケート結果では、全体の79%がプログラム内容に満足しているとの回答を得ました。また、障がいに対する理解は91%が、義肢装具についての理解は89%が深まったとのことでした。

以上の結果から、小中学校のみならず高等学校においても、「障がい」や「義肢装具士」についての理解を高めることができた啓発活動であったことを示すものと思われまます。

今回で6回目となる「オリ・パラ教育推進支援プログラム」を初めて高等学校で開催しましたが、進路を考える大切な時期に「障がい者・パラアスリート」、その方々を支援する義肢装具士の業務を伝える事は、「障がい者理解」や「ボランティアマインドの育成」に通じる非常に大切な教育支援事業であると考えます。当協会WGでは、これからも積極的にオリンピック・パラリンピック教育推進プログラムに取り組んで参ります。

アンケート（生徒の記述感想）

- ・大切なお時間をありがとうございました。
- ・理解が深まった。
- ・テニスが見れて良かった。
- ・自分も脊椎分離症だったので聞いていて楽しかった。
- ・「特別扱いしないで普通に接してほしい」という言葉がすごく心に響きました。
- ・良い経験ができた。
- ・今回の経験を通して、考え方がとても変わった。
- ・世界には色々な人がいることが分かった。
- ・知的障がいや精神障がいの人達との関わりがあったが、身体障がいは関わりがなかったので興味深かった。
- ・五体満足のありがたみを痛感した。
- ・階段のシーンとか、当事者の気持ちなど普段ではふれられないものを感じた。